枠超え「地球人」貫く

視点・直言

AMDAの理念

今年のノーベル平和賞は、国際民間医療援助団体の「国境なき医師団」（MSF、本部・フランス）が受賞し、改めて、医療を専門とした非政府間組織（NGO）に注目が集まった。岡山市に本部があるアジア医師連絡協議会（AMDA）も、世界中で地域紛争による難民や災害の被災者らの救援活動を展開している。同医師団のノーベル賞受賞に合わせて、発足から十五年を迎えたAMDAの歴史や理念をもう一度考えてみた。

（岡山支局　根本　博行）

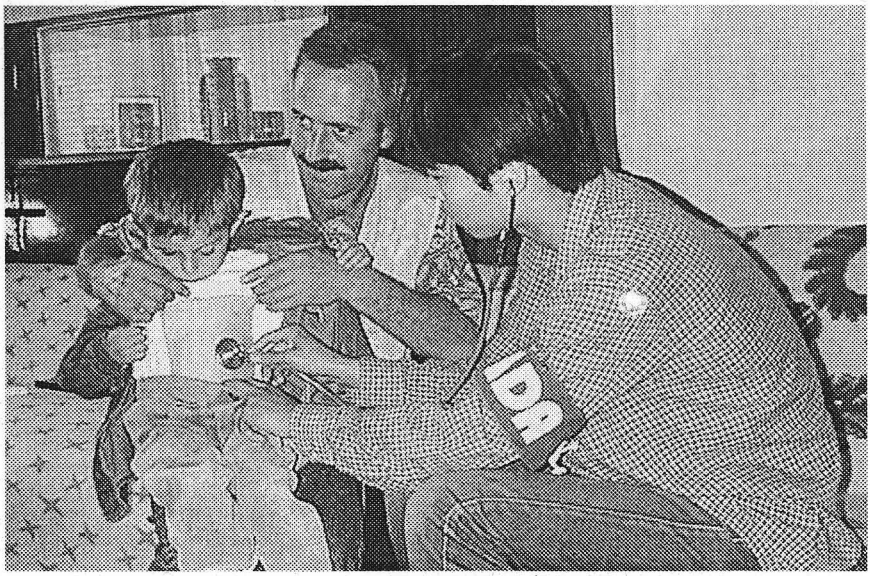
AMDAは、菅波茂代表(52)がアジアの医学生に呼び掛けて作った「アジア医学生国際会議」を前身に、同医師団の結成から十三年後の一九八四年、アジアでの医療救援活動などを目的に設立された。

今では、岡山市の本部・支部に加え、海外ではネパールやアルバニアなど二十四か国・地域に二十四支部があり、国内外の医師や看護婦ら二千人を超す会員を擁するなど、世界最大級の医療NGOに成長した。

その緊急救援活動は、今年だけを取り上げても目を見張るものがある。

一月のコロンビア地震の被災者救援に始まり、四月にはコソボ難民支援に急行。夏以降もトルコ大地震（八月）、東ティモール独立紛争（九月）、台湾大地震（同）などが相次ぎ、その度にスタッフをいち早く派遣し、被災者や難民を助けてきた。

幾つかの救援報告会見を取材する機会を得た。任務を終え、ほんの数時間前に帰国したばかりの派遣メンバー。疲れているはずなのに、被災地の様子を時間をかけて丁寧に説明する。「医療従事者として、困っている人がいたら助けるのは当然」という三十歳代の医師の言葉に真のボランティアを感じた。



AMDAのスタッフは、世界各地で医療救援活動を展開している（99年、アルバニアで難民の子供を診察するAMDAの医師）

緊急派遣は、予算付けを待たずに出発することが多い。小池彰和・会員情報局長(68)は「ほかの事案と違う。だれかが死ぬ恐れがあるんです」。こうした奉仕精神と行動力がAMDAの原点とも言え、活動を重ねるたびに全国から参加希望者が増える。

ここまでのAMDAの道のりは、平たんではなかった。緊急救援活動を始めた九〇年代初頭、国連難民高等弁務官から受け入れを拒否されたこともあった。九五年のサハリン大地震でも当局から「拒否」を告げられた。

しかし、迅速で粘り強い活動と「困っている時はお互いさま」という「相互扶助」の精神で救援活動に尽力。同大地震では「阪神大震災でお世話になったお礼を」と再三申し入れ、活動許可が出された。

とくに、九四年のルワンダ難民救援では、日本のPKO派遣に先駆けて先遣隊を投入。現地の高い評価を得たほか、難民キャンプで生まれた赤ちゃんに「アム」名前が付くなど、その存在中に知らしめるきっかけ

緊急派遣が目立つが、活割は復興支援などのプロジ活動だ。

医療不足の国々での病院飲料水の改良、HIV患者ンセリング、地域保健医療地道な活動でも世界中の尊を救い続けている。

国境なき医師団と同じ場療活動にあたることも多い。A。同医師団の受賞に菅波「医療貢献団体が認められに大きな意義がある。我々や宗教、言語などに関係なっている人に手を差し伸べたい」と話した。

同医師団もAMDAも、思想、国家などに捕らわれ〈地球人〉という立場に立るように思える。

AMDAの活動資金は、援助や寄付金が中心だが、持ち出しもあるという。さ活躍を支えるためには財政実は欠かせず、多くの市民が求められている。